

少年

福 沢 正 男

高垣純平は生まれた時から脱腸と言う肉体的「欠陥」を持つていた。股間に穴が開いていて、そこから腸が陰のうちの中の下がるのである。陰のうはいつも風船の様に膨らんでいた。それは見えていて滑稽でもあり、惨めでもあった。

彼の父は家業のオートバイ修理に、商売というより趣味として専念していて、息子が「かたわ」であることも、ほとんど気にかけていなかった。

母は昌乃といって「後妻」で若かったが、精神的に幾らか障害を持つていて、人並みの育児のできる女ではなかった。純平が四才の時、一家で大阪の昌乃の生家へ行ったことがあった。その時、昌乃の母は、「脱腸ならちようど、いいものがある」と言つてヒモのようなものを持つて来た。それは脱腸帯といわれるもので、ゴムヒモの middle に平盤が付いていて、それで局部を押えておくのだという。昌乃の母は純平を寝かせ、下半身を裸にして脱腸帯の使い方を昌乃に教えた。

純平は家へ帰つてからも暫くは脱腸帯を宛がわれていたが、昌乃が次第に面倒がるようになり、やがて忘れてしまったので、結局以前と変わらなかつた。それ以後は昌乃も純平の体のことを気遣わなくなつた。

純平はそのまま育てられ、やがて小学校に入学した。初めのうちはよかつた。が、三年生頃になると、彼は自分が他の子供と違つた体をしていることに気付いた。他の子供達もそのことを言うようになった。

「お前のちんぽ、大きいな。どうして？」

「そういうの、だつちよつて言うんだろ？」

子供達は率直だつた。やがてそれらは嘲笑となつた。純平とケンカをした子供は必ず「だつちよ」を純平に浴びせた。歌うように囃し立てて、純平が泣いて逃げ出すまでそれを続けた。

昌乃は平気で純平を銭湯に連れて行つた。彼女には周囲の目を気にするだけの羞恥心がなかつた。しかし純平はそうではなくなつてきた。大人達より自分と同じ位の子供達の目や口をひどく気にかけた。彼は銭湯へ行くのを嫌がつた。父や母はそういう彼を無闇に叱つた。

「早く行かんかつ、このバカもの！！」

「いやだ！ 行きたくない！！」

父は怒鳴つた。純平は涙声で反抗した。けれども彼は銭湯へ行かない理由を自分から言わなかつた。人に指摘されても認めなかつた。それは何とも言えぬ嫌なものであり、自分を他人と区別する印のようなものだつた。自分からそれを言うことは、その印を認め、区別を認めることになるのだと、純平は本能的に考えていた。

昌乃は純平が十才の時、心臓病で死んだ。三十二才だつた。彼女は大阪の下町のうどん屋に三女として

生まれ、精神障害と「口減らし」のため、八才の時、名古屋の高垣家へ養女として世話された。両家の間には何の縁故もなく、大阪の生家が新聞に出した「女兒血正体健美兒慈愛深き方へ差し上度し」の三行広告を、偶然、当時大阪にいた高垣家の主人が見て、それが「縁」となったのである。しかし、昌乃は高垣家でも持て余され、十八才の時に或るサーカス団に団員の子守り役として世話された。

純平の父である武内健一は、仕事の関係で（彼は猿の乗る小型のオートバイも作っていた）サーカス団に出入りしているうちに昌乃の素性を知り、彼女に同情した。無神経な反面、彼には人の良い所があった。彼は昌乃の嫁ぎ先を探すことを団長に約束した。そして実際に嫁がせもしたが、昌乃は二度もそこを逃げ出し、先でも断ってきた。昌乃はもうどこへも行きたくないからここへおいてくれ、と健一に頼んだ。終戦を境に意見の違いから妻と別れ、一人暮らしをしていた健一も女手が欲しかったので承知した。しかし持ち前の無神経さから昌乃を自分の籍へ入れることをせず、そのまま同棲した。

昌乃は不器用ながら一所懸命に健一に尽くした。純平が生れ、彼女は母となった。子供を育てることは彼女の手に余る仕事であったが、彼女はバケツで純平を洗ったり、おむつを付け忘れて背に負い、背中を糞だらけにしたりしながら純平を育てた。

昌乃は三十才頃から体を悪くし、最後の一年は殆んど寝たきりであった。純平が昌乃の食事や下の世話をした。時々ご飯替りに食べる「かたくり」を純平にも分け与えたりしながら、昌乃は晩年を過ごした。昭和三十二年七月、むし暑い夜中に昌乃は大きな発作に襲われ、医者 of 来ない間に、純平の名を呼びながら死んだ。

純平は昌乃の死による精神的衝撃を殆んど受けなかった。葬式に見知らぬ人が何人か来たことや、霊柩車に乗ったこと、火葬場で母の棺を入れた釜の蓋を閉めたことなどが印象に残ったが、それは珍しいから過ぎなかった。悲しみは殆んどなく、開放感が母の死の彼にもたらした感情のすべてであった。母の死によって母の世話から開放されるならば、それは純平にとって割のいい取引だったのである。

父の健一は依然として純平には無関心のまま、ますます自分の仕事に熱中していった。彼も一種の開放感を味わっていたのだ。息子とのかかわりは食事を共にすることと、せびられた小遣いを小言を言いながら渡すことぐらいであった。

純平が四年生に進級したばかりの或る日、純平のクラスの担任教師をしている畑中啓子は、純平がひどくきたない体をしていることを咎めた。彼女はまだ純平の「病氣」のことを知らなかった。

「あなたはどうしてお顔を洗ってこないの？」

「……」

純平は恥ずかしさに下を向いて黙っていた。彼の顔や腕にはアザのようにアカ汚れが付いていた。

「先生、高垣はね、もうひと月も風呂へ入ってないんだよ」

誰かが叫んだ。続いて何人かもそれを支持した。女の子達の間からは非難と軽蔑のざわめきが起こった。畑中はそれを制してから、

「お風呂が嫌いな、え？ 何とか言いなさい」

と、下を向いている純平の顔を覗き込みながら言った。ひと言も話さない純平に、畑中は少し腹を立てた。

「高垣君!!」

強い口調で彼女は純平を叱った。途端に純平は激しく泣き出した。

「何を泣くことがあるのよ。はっきり答えればいいじゃないの」

畑中は純平が泣き出しても調子をゆるめなかった。

「高垣君、立っていなさい。素直じゃない子は先生は嫌いです!」

純平は、なかなか立たなかった。畑中は純平の腕を取ると無理に立たせ、教壇の脇へ引っ張っていった。

純平は激しく嗚咽しながら中腰の妙な格好をして立っていた。それから戸口の柱の所までにじり寄って行き、柱にもたれて執拗に泣き続けた。

「まるでセミねえ、木につかまって泣いてるわ」

畑中が苦笑しながら言うと、子供達は一斉に笑った。その時間中、純平はずっとそのままの格好で立っていた。畑中は時々純平に質問を繰り返したが、何の答えも得られなかった。彼女は根負けし、あきれた気持ちで純平を許した。

畑中は職員室で臨席の教師にそのことを話した。

「いや、実はあの子はねえ……」

臨席の教師は畑中の話を最後まで聞いてから、さもあろうといった表情で純平の「病氣」のことを話した。そして、幾分同情を込めて純平の家の事情なども付け加えた。

「そうだったんですか……」

畑中は納得のいくものを感じた。子供のことをよく知らずに叱ったことは自分が悪かったと思った。彼女は純平にあやまるべきかどうかを考えた。他の子供達の前で教師にあんなことを言われ、しかも立たされた純平の心中が察せられた。けれども

結局、彼女はあやまらなかった。ただそれ以後は純平にそのことに関したことを言わなくなったただけだった。

純平に「セミ」というあだ名が付いた。そのあだ名はいわれの説明も付けて、ずっと後まで子供達の間で言い続けられた。

純平は決して卑屈にはならなかった。風呂へ入らないことで咎められても、それは自分が悪いからだとか割り切っていて、学友達を憎むようなことはしなかった。彼はよく泣いたが、又よく笑いました。成績も行動も格別悪くなかったので、他のことでは評価されていた。

この頃から純平はものに凝る性癖を現わしてきた。彼は読書の面白さを知り、「ピノキオ」や「アルプスの少女」「がんばって王」などを讀んだ。自分をいじめた連中をダンテスのように復讐してやろうなどと本気で空想したりした。

彼は漫画も好きだった。その頃はやった「月光仮面」や「まぼろし探偵」などはかかさず讀んだ。

五年生になった新しいクラスで、純平に森裕二という友達が出来た。裕二は漫画を書くことが上手で、ただ写すだけでなく創作もした。白紙のノートにマスを区切り連載形式で何冊も書いていた。

純平はそういう裕二から強い影響を受けて、自分でも漫画を書くようになった。裕二は純平の「病氣」のことを知っていて、以前から同情していた。しかし積極的な性格ではないので、自分から純平に近づく

ことはなかった。漫画のことなどで純平とよく話すようになってからは彼を家へ呼んだりした。それは純平を非常に喜ばせた。

二人は親しくなったが、それは平等的な親しさではなく、幾らか純平のほうが「おしかける」感じで、お人よしでやさしい所のある裕二に純平が媚びているような関係であった。純平が裕二の気に入らないことをした時、裕二が「縁を切るゾ」と純平をおどかしていたことにもそれは現れていた。しかし裕二は本気でおどかしていたのではなく、純平の彼に対する媚びを無意識に利用していたのであって、純平もそれを知っていて面白半分に従っていたのだ。この関係は純平がもつと成長して誰とでも対等に付きあえるようになってからも形骸化したまま続いた。それはどちらにも懐かしい思い出として残った。

五年生の夏、純平の家にちよつとした変化が起きた。純平に新しい「母」が出来たのである。

武内健一は或る懇意な客から、北島梅子という中年の女を紹介された。健一の曖昧な返事に、貰うのが嫌なら手伝いだけでもいいからということ、梅子は初め昼中だけ来て炊事や洗濯などをして行った。

梅子は前年夫を亡くして今は実家にいた。彼女はいわゆる「石女」で、亡夫と十二年一緒にいたが子供はなかった。少女の頃、大病で生理が止まってしまったのだ。彼女は自分は結婚できない体なのだという暗い思いで青春を過した。戦争が始まって、彼女は従軍看護婦として大陸へ渡った。死ぬつもりだった。しかし、終戦となり、又日本へ帰った。引き揚げ船の中で亡夫と知り合い、結婚した。梅子はその時二十八才だった。亡夫は子供なぞ出来ぬ方が気楽でいいといって梅子と結婚したが、陰気な性格で初めから彼女を愛していなかった。日本へ帰ってからの生活に困っていたため、多少とも財のあるという梅子の話に文字通り食い付いたのだった。彼は晩年梅子の尽力もあって小さな会社を創ったが、すぐに倒産し、自殺してしまった。

以後、梅子は実家で両親の世話をしたりしていたが、叔父の持って来た話から武内健一の家へ行くようになったのである。

梅子が初めて純平の家へ来た日、久し振りに女の作った夕食を取りながら健一は冗談半分に、「お前のかあちゃんだぞ。かあちゃんと呼ばないかんぞ」と、梅子を純平に紹介した。彼は機嫌がよかった。

純平は父の言うことがよくわからなかったが、食事のうまさに満足していたので、梅子に悪い感情を持たなかった。

梅子がかつぼう着のよく似合う、やや大柄の女だった。子供を生まないため体が引き締まっていた。色が白く、純平には非常に美しく見えた。化粧のせいだった。

食事が済むと、梅子が後片付けをした。純平は今までのように米をといだり茶碗を洗ったりしなくてもいいので嬉しくなった。

梅子は純平がひどくきたない体をしているのを見て風呂へ連れて行こうとした。純平は嫌がった。そして少しためらってからズボンを脱いであからさまに「病氣」を梅子に見せた。

梅子はちよつと驚いたが、すぐ気を取り直し、お湯を沸かして純平の体を拭いてやった。

「ね、一度、お医者さんへ行きましようか」

梅子はそう言った。純平がこの「病氣」のためにずいぶん苦勞したであろうことを、彼女は自分の若い頃を思い出し、ちよつと胸をつまらせた。この家に来て、この子を育てることで自分のこれからの人生を費そうか、と彼女は考えた。それが自分の青春を償うことになるような気がした。

「お医者さんへ行きましょう」

もう一度、彼女は言った。純平はその意味がわからなかった。

「どうして医者へ行くの？」

「お医者さんで治して貰うのよ、これを」

梅子は笑って純平の性器をつついた。

「これ、治るの！！ 本当？」

純平は叫んだ。信じられなかったのだ。この「病氣」は一生涯治らずこのままなのだと思っていた。梅子は微笑を浮かべて大きく頷いた。

翌日、梅子は健一と話をした。自分はここへ嫁ぎたいと思っていること、純平を医者に見せて治してやりたいことなどを彼女は熱を入れて話した。健一には何の言い分もなかった。そんないいことはない、ぜひ頼みたいと言った。自分のためとか純平のためというより、梅子のそういう気持ちに彼は喜んだ。

梅子はその夜、家へ帰って父母と相談した。両親はお前にも行く所があればと快く賛成した。純平の手術の金も出してやると言った。梅子は叔父にも電話し、その旨を告げた。無論、叔父も大賛成だった。

ひと月ほどして、梅子はささやかな道具と共に武内家へ嫁いで来た。

梅子の両親と叔父夫婦が来て健一と挨拶を交し、梅子自身の作った簡単な料理で祝宴を設けた。

純平はこれまでで一番楽しい一時を過ごした。彼は始終、梅子に付いて廻り、休みなく話しかけた。梅子はいちいち笑ってそれに答えてやった。

その夜、純平は今夜だけという約束で梅子の腕の中で寝た。初夜の邪魔をされた健一は少し面白くなかったが、梅子の腕の中で眠っている純平を見ているのは悪くなかった。久し振りに父親らしい気持ちを彼は味わった。

二週間ほどして純平は梅子と一緒に病院へ行った。脱腸の診察を受けるためだった。

「ははあ、右外鼠けいヘルニアですな。手術をすればすぐ治ってしまいますよ」

医師は純平の局部に触れながら言った。

「息を吸い込んで」

純平が息を吸い込んだ時、医師は膨らんだ陰のうを手で圧迫し、腸を穴の中へ戻してしまった。純平の性器は普通の子供と殆ど変わらないようになった。純平は目を輝かせた。

「こうしておいて、あとはこの穴をふさぐんですよ。一週間位の入院です」

医師は梅子に親切に説明した。梅子はすぐ手術出来るよう手続きを取った。三日後にベッドが空くので、その時ということに決った。

三日して、純平は又梅子に連れられて病院へ行った。今度は入院するためだ。毛布、下着、タオル、寝巻などの荷物と一緒にタクシーで家を出た。

「行って来ます」

車の窓から純平は手を振った。

「ああ」

健一は頷いて答えると、すぐ家の中に引っ込んだ。無愛想な人だと梅子は苦笑した。健一は手術のことについて殆んど心配らしい気持を示さなかった。すべてを梅子に任せていた。

純平は今度家へ帰る時にはもう自分は普通の人間なんだと思うと、あふれるような嬉しさが胸に湧いた。

「一週間だって言ったね、先生は」

「そうよ、すぐ帰って来れるわ」

「手術って痛いかな？」

「少しはね。手術、もうやめる？」

「いや!!!」

梅子のはっきりした純平の返事を聞いて笑った。明るい子だと思った。

車が病院に着いた。事務所で取り次いで貰い、看護婦に案内されて病室へ入った。ベッドが四つあり、三人の子供の患者が寝ていた。彼等は好奇の目で新しい入室者を見た。純平はちよつと恥ずかしい気がしたが、梅子に言われて着替えを始めた。

純平と梅子が話していると、手術の用意が出来たと言いながら看護婦が入ってきた。

純平は手術室へ運ばれ、手術を受けた。一時間程で済み、又病室へ運ばれた。

入院している間、畑中や裕二、その他クラスの者が何人も見舞に来た。中にはよく純平を泣かせた者もいた。

純平は皆に心から礼を言った。畑中が来た時は嬉しくて泣き出してしまった。手術した後が痛むので廻りの者は色々気を使った。